

信長は東海より身を起して終に入洛の桂冠を戴き、その武名赫々たるものがあつたが、西の方中國を征略しやうと思ふに、大坂に本願寺があつてその銳鋒を鈍らされる感があつた。のみならず信長の敵視した諸大名——毛利、武田、上杉、朝倉、細川、松永、三好等は悉く本願寺に姻戚關係を結んで居るのでなければ、特別の舊好を温めて居るものであつた。況んや地方に於ける一向一揆の勢力は、信長の前途に陰翳を投ずるものばかりであつた。石山戦争の原因を説くものは、元龜元年正月に信長が使を本願寺に遣はして自ら築城せんがために寺基の移轉を迫つたところ、顯如はその請を容れるつもりであつたが、その家臣門徒が容易に應じないために拒絶したので、遂に信長の怒を買つたのであるといふ。その原因に就いてはなほ議すべき餘地はあらうが、兎に角信長は元龜元年八月野田福島に陣して、先づ三好の黨を攻め、虚に乗じて本願寺を衝く計畫であつたが、その謀策は早くも漏れて本願寺側の知るところとなり、檄を全國各地の門徒に飛ばして宗門大事の秋を報じた。こゝに門徒の總動員が行はれ、熱烈な殉教の血に燃えて、本願寺を死守し、法敵覆滅の計を樹てることとなつた。九月信長の軍は大敗して潰走せねばならなかつた。はじめ信長は門徒は烏合の衆高を括つてゐるが、事實は案に違ふたので、更に攻撃を續ける計畫を立てたが、淺井朝倉の兵が背後を窺ふに聞いて、急

に軍を京都に引き、交通を遮断して、諸國門徒の來集を防ぎ、徐に本願寺を倒壊しやうとした、けれども信長は、宗教は壓迫すればするほど、その膨脹力を偉大ならしめ、恐るべき反動の現はれることを知らなかつた。火に油を注ぐが如く殉教の血潮は燃えさかる一方であつた。かくして近江に於ては、戦慄すべき門徒の虐殺が行はれた。信長に對する地方の叛亂として最も大きかつたのは、尾張長島の一揆であつた。信長は自ら大軍を率ゐて、一舉にこれを屠るつもりであつたが、却つて一揆のために破られてしまつた。そこで信長は先づ本願寺を後援する淺井朝倉を亡ぼさうとして、先づその一味たる比叡山を攻撃し、こゝに未曾有の大慘劇を出現した。元龜二年九月十二日にさしもの山門の堂塔も殆んど餘すところなく炎上し全滅の状態に陥つた。轉じて信長は淺井朝倉の連絡を断つて、先づ越前に進んで朝倉氏を滅ぼし、次いで無援の淺井氏を倒した。かくて長島を攻圍したけれども、又もや門徒に破られて岐阜に於けた時は命からがらであつた。天正二年六月三度信長は長島を攻め立てたが陥らなかつた。そこで偽つて講和し、門徒の退城するところを伏兵を以て銃殺せしめ、城内に火を放つて男女二萬餘人を焼死せしめた。かくして信長は加越の門徒を壓倒した上で、鋒を轉じて石山に向つたが、幾度攻めても石山は微動だにしなかつた。強靱な信長の意志も、石山には齒が立たなかつ

たのである。信長はやむなく持久戦の策に出で先づ大阪の糧道を絶たうとしたが、法嗣教如は潜かに安藝に赴いて、毛利氏に援助を請ふた。毛利氏は直ちにこれに應じて、本願寺を助けることとなり、糧食を無事城内に運搬したのみならず紀州雑賀の徒が、根來寺の衆徒と共に兵を起して大阪に應じて續いて荒木村重が攝津で謀叛して本願寺及び毛利氏と結ばうとした。大阪城内に於ては恒例の法事が常に變らず勤修せられ、白熱的な信仰に活きた門徒は死を觀ることに眞に歸するが如く、戦時状態は十年以上も續いたが、少しも疲勞困憊の色がなかつた。信長の精銳も軍略も實際如何にもするに出来なかつた。さすがの信長もいつまでも大阪を相手に戦つて居られなかつたから、やむを得ず勅命を請ひ奉るより外に途のないことを悟つて、正親町天皇にその旨を奏請し、八年三月に庭田重具と勸修寺晴豊が勅使になつて下向し、こゝにはじめて和議を結ぶこととなつた。石山戦争の發端から數へるに恰度十一年目である。顯如は七ヶ條から成る信長の誓詞を容れて四月十日に大阪を退城し紀州鷲森に赴いた。この構和については顯如と舊交のある近衛前久も大いに斡旋につこめた。

顯如は既に鷲森に退いたにも拘らず、法嗣教如は尙大阪に留まつて居た。蓋し和を結んで開城した後、信長の陰險な手段で本願寺を覆滅する策に出ではしまいか疑つたからであるが、顯如や前久の

勸告に従ひ、更に信長と誓約を結んで大阪を明け渡すこととなつた。八月二日に愈城を信長の手に讓つた。教如は不慮の災難の身にふりかゝることを知つて、三日以前に微行して城を出て、紀州に赴いたが、顯如は信長の怒に觸れることを恐れて、對面を避け父子の義絶をしたと傳へられる。その後信長は教如等の豫測した如く、本願寺の勲絶を謀り、天正十年に弟、信孝等を遣はして鷲森を攻めしめ、非常の危難に臨んだが、信長が京都本能寺で明智光秀に弑せられたために、攻圍の軍も槍々として引き上げ、信長對本願寺の問題も、意外な方面から一段落を告げることとなつた。然し解決されぬのは顯如父子の義絶である。本願寺が兩派に分裂する兆候は歴々として現はれて來たのである。

顯如及び教如は天正十一年に鷲森を出て和泉の貝塚に移り、十三年には攝津天滿に轉じたが、十九年正月に至つて、豊臣秀吉は顯如の請によつて京都七條堀川の地十萬餘歩を施入したから、同年八月この地に工を起して翌文祿元年に漸く出來上つた御影堂に祖像を迎へた。ところがその年の十一月二十四日に顯如は俄に遷化した。顯如には三男二女があつた一光壽(即ち教如)、二女子、三女子、四顯尊、五光昭である。秀吉は一旦教如をして寺主たらしめたが、その後秀吉は有馬入湯中に顯如の後室如春尼が、顯如の留守職讓狀を提出して、顯如の意は季子光昭にあつたことを述べ、秀吉の承認を得た。

そこで教如は隠退するこゝとなり、光昭が襲職し、准如が即ちこれである。當時教如を裏の門跡、准如を表の門跡といひ、門徒は各その好む所に從つて表方と裏方に分裂した。關ヶ原の戦後慶長七年に至り徳川家康は教如に同情を寄せ、後陽成天皇の御裁可を経て七條烏丸の地方四町を與へ、本願寺を興さしめた。こゝに於て教如は第十二世の職に復するこゝとなり、門徒の去就は任意とされたので、教團門末の分裂は愈既定の事實となつて、本願寺は東西に分立するこゝとなつた。

これよりさき信長の居城たる安土に近接した錦織寺は、寺門存続の方法として終に自ら浄土宗を稱へ、本願寺との同を避けんこした。法衣動行も改められ、教義も鎮西流を交へて二宗兼學を標榜した。かくして錦織寺は江戸時代に入つて混亂の状態に陥り、第十三世慈綱の出る頃までこの状態を續けた。

第六章 江戸時代以後に於ける眞宗の發展

これまで自由に發展して來た教團も江戸時代になつてからは、徳川幕府の政治方針によつて左右されるやうになつた。幕府の宗教政策として執つたところを要約すれば、第一に學問の獎勵を行つた、これは宗教方面ばかりのこゝでなく、家康以來文教の振興を企て、戰國時代の氣分を一掃しようとしたいは、平和促進の策であつた。第二に寺院の本末關係を厳しく規定した、從來宗派と寺院と僧俗との三者の關係については別段法制上の規定もなかつたが、江戸時代になつてこの關係は嚴重に定められ、本末關係は全く動かぬものとなつた。のみならず本末の間に幾多の寺格の區別を設けて、關心をこの點に集注せしめた。同時に僧侶の階級を厳しく區別し、その昇階を猥りにするを戒めた。僧官の任命に大變勿體をつけ、一般僧侶をして教界以外に眼を轉ずるこゝを防いだ。即ちこれ教界に於ける階級制度の確立である。第三には徒黨を結合して團體行動をこゝを禁じた、これも教界ばかりでなく、一般社會政策として幕府のつねに聲明したところである。第四には房舍所領の買賣入質及び私に寺院を建立するこゝを禁じた。一向一揆の勢の恐ろしいこゝは家康の苦い經驗で熟知のこゝ

であり、本願寺に對する信長の悪戦苦闘は徳川氏にまつて長く記憶に残さねばならぬことであつた。そこで幕府の政策としては、僧侶を教界内に閉ぢ込める方針をまつたのである。畢竟一宗派の勢力の集中を避けんごしたのであつて、徳川氏にして累代の浄土宗を奉じたるに拘らず、幕府としては天台宗をまつた一例に照しても、このことは明白である。この政策に原因して、一宗派内に於ける爭論事件が少くなかつた。曹洞宗が能山越山の兩派に分れて對峙したのも、本願寺が東西に分裂して正閏を爭ふたのもこの點から注意することが出来る。本願寺の正閏問題は寛永十五年に至つて西派から先づ表裏問答が出版せられ、ついで金鐘記、東林更鳴集が著はれて盛んに東派を攻撃し、東派からは翻迷集、嫡庶問答、本願寺由緒通鑑等が著はされて、これに應戦し、問題は益々紛糾して容易に解決を見なかつた。分派の當時に於てさへ極めて事情が複雑で真相を窺はしめぬのであるから、後になつては殆んご感情の衝突となり、到底解決の出来る問題でなかつた。本願寺が東西に分裂して互ひに争つて居ることが、幕府からいへばその政策が効を奏した譯である。

江戸時代に於ける眞宗の發展として述べべきことは、先づ教學の勃興である。幕府が學問を奨励したことは前述の如くであつた。各宗の學事が盛大に赴いて、日蓮諸派の檀林、眞言新義の智豊兩山、

天台叡山の學寮、芝増上寺の談林等がその主なものであるが、眞宗に於ける教學の勃興もこの趨勢に伴ふものである。江戸初期に於ける眞宗は東西本願寺、高田専修寺、澁谷佛光寺、木部錦織寺及び越前四派から成り立つてゐたが、中んづく東西本願寺が眞宗の大部分を占め、しかも東西相伯仲する勢であつた。東派は家康の後援によつてはじめて獨立したもので、教如に次いで宣如の出た頃は、寺門諸般の經營に力を注がねばならなかつたから、教學の勃興は先づ西派からはじまつた。

分派當時准如は十六歳の弱齡であつたから、生母の如春尼(細川晴元の女)が萬事の指揮をした。如春尼は西本願寺の基礎を固めた尼將軍ともいふべきであつた。寛永七年に准如は五十四歳で示寂したので、良如が法燈を嗣いだだがその治山三十三年間に於ける業績としては、現今の堂宇の建立も、一派の學林の創立を擧げねばならぬ。現に桃山時代の建築物として有名な四脚門、車寄、大立關、大廣間、白書院、大厨などは、寛永九年に伏見城の遺構を移したものであるが、現存する御影堂も三年の日月を費して同十三年に竣工した。たゞ阿彌陀堂だけは第十七世の法如の時に出來上つたのである。この頃准立(河内出口光善寺)ミ了尊(紀伊和歌浦性善寺)といふ二人の學者が出來たが、寛永十六年に始めて本山茶所の西に餐舎を設け、准立を以て初代の能化職とした、能化職の稱呼は高野山で用ふるところ

を興ふたもので、東派の講師職に相當する。費舎の建造については京都の信徒野村宗句といふ者がその費用を喜捨し、講堂は同年十一月に落慶した。翌年の夏には准立がはじめてこの講堂で和讃の講義をして居る。ミころが准立の孫寂空が故あつて西派から東に轉じたために、准立の功まで奪はれ、その能化職は削除されて後世第二代の西吟を以て初代と呼ばれることゝなつた。西吟は了尊の門下で、同門の月感と共に當時の學匠であつた。正保四年に費舎は西侍町に移された。良如の院號はその業績を彰はすにふさはしい教興院といふのであつた。寛文二年に五十一歳で示寂した。次の寂如に至つて西派を龍谷といふ名で呼ぶやうになつた。蓋し龍谷といふ大谷の字を分けたのである。寂如は領解文(蓮如の作)を出言して信徒に安心報謝師徳法度といふ眞俗二諦にわたる四大綱領を示し、又自ら教行信證(貞享三年)や阿彌陀經の大意(元祿五年)を講じて、學徒をはけまし、光隆寺知空の如き一派の碩學を拔擢して教學の振興を謀つた。時は正に文藝復興期に際會した。

これより先き延寶八年に費舎を東中筋花屋町に再轉しはじめて學林と稱したが從來は單に學費と呼んで居た。知空は第二代の能化になつたが、畿内以外には未だ多く學者を見なかつた西吟の時代に比べるに、格段の進歩を示し一派の學事は漸く全國に普及するやうになつた。知空は宗學に曉通した

ばかりでなく、廣く一般佛教學に寄與する所が頗る多かつた。その維摩經左券の如きは、明治年間に曹洞宗大學で再刊せられて居る。知空は在職約五十年、享保三年八月に歿したので、若霖がその後を承けて第三代の能化となり、若霖の門下から法霖、智選の兩碩匠の出づるに及んで、一派の學事は蘭菊美を競ふの有様であつた。特に法霖は一派宗學の體系を確立し、自ら博識を矜つた華嚴の鳳潭の主張も、法霖の笑顰臂の著によつて破斥されてしまつた。鳳潭はこれに對して却顰臂を著はしたが、これはたゞ申譯にすぎぬものであつて、眞宗の惡罵も見事にミゞめを刺された。第十五世の住如は九條兼晴の第三子であり、第十六世の湛如は閑院直仁親王の女を入れて室としたが、一派の活動は末徒の手に歸し、諸國の末寺も争ふて宗學を生命とする迄に進んで來た。第十九世の法如の時代は最も教學多事で、一派の生命に關する三業安心の擾亂がその端を開いたのもこの時代である。なほ法如の在世中記憶すべきは眞宗法要三十九部三十一冊を校刻上梓したことで、宗祖をはじめ蓮如に至る和語聖典の定本を世に弘めた。この事業について、大阪の月笠門下の桂巖泰巖兄弟が最も力を盡し、道粹僧樸等の學匠がこれを輔けた。

寛保元年に第四代の能化法霖が四十九歳で歿した後は、十餘年の間、能化職は缺員になつた。寶曆

五年に至つて義能が第五代の能化になつたが、この時に當つて一方には若霖門下の智暹が居た。明和三年、智暹が眞宗本尊義を著はした時、その末段に至つて大いに法霖の説に攻撃を加へた。ところが當時の學林は多く法霖の門下であつたから、これを見て激怒し本尊義一百問なきを著はして反駁を試みたばかりでなく、本山に逼つて本尊義の流布を停められたいと請ふた。こゝに於て學林側の功存、繼成、天倪等智暹の一派との論争が起つた。學風大いに起らんとして、異義の徒を出だし、安心の評論を生ずるに至つたのであるが、その一大爆發ともいふべきものは、第六代の能化功存の願生歸命辨に胎胎して、第七代の能化智洞の時に至つてますます三業歸命を主張するに至つて勃發した大擾亂であつた。智洞は僧樸の門下で博學の英才であつたが、就職後直ちに入門六條名づけて安心の要領六箇條を記して、功存の三業歸命の説を潤色し、これを以て入門者の安心の規準たらしめた。その他功存の説を助成するところがあつた。はじめ智洞の左右には正運、大魯、知識、曉性、帶道、芳英、察巖、昌瑞といふ所謂八僧と呼ばれた龍象があつたから、何人もその鋭鋒に向ふものがなかつたけれども、河内の道隱（僧鎔の門人）先づ能化の説を糾弾する魁となり、安藝の慧雲門下もその非を鳴らした。中ん就く糾弾の衝に立つたのは同じく安藝の學徒大瀧であつた。大瀧ははじめ道命の名で十六問尋を

學林に送り、ついで更に金剛鐮を著はし、横超直道の四字を冠してこれを刊行した。本書の刊行は歸趣に迷ふた人心に對してその指針になつたと共に、學林派はこれがために殆んど致命傷を蒙つたといつてもよい。かくて道隱は近畿の徒を率ゐ、大瀧は藝備の學徒を糾合して、猛烈に學林を攻撃した。こゝに至つて八僧の芳英の如きは、その非を悟つたが、他は權力を恃んでその非を枉げず、本山が稍藝備學徒の説に傾くのを見て却つて忿懣の情を高めたが、偶々美濃の門徒が驟起して本山當路者の非を叫んだことからは、端なくも京都所司代の耳に入り、本山も手を下して學林を壓伏しようとしたが、智洞の徒は暴力をもつて本山を威壓し、狂者の如くなつた學林派の同行の中には槍を提げて、法主の居間近く闖入し、安心の權はすべて能化に一任すべきことを迫り、その印證を強奪するに至つた。西六條の地内はさながら戦場の如き有様であつた。享和三年七月に至り、京都所司代は學林派ならびに反學林派の首領を召喚して糺明した結果、智洞は常に大瀧のために論詰せられ、一往兩者の正邪を明かにするこゝが出来た。そこで翌文化元年に幕府は紛擾の關係者一同を召喚した。この時智洞は既に罪囚の身として取扱はれ、軍鶏籠によつて護送されたといふ。かくして文化三年に至り寺社奉行脇坂淡路守安董の判決によつて、幕府は智洞等三業派を刑に處した。事全く定まつて前後八年に互る擾亂も

こゝに平定したが、この擾亂のために一人専制の能化職は廢せられることとなり、その後學識のすぐれたものが選ばれて輪次安居の講者もなつた。同年十一月、本如は裁斷御書を作つて使僧を諸國に派し、門末を訓諭してその終局を結んだ。文化元年までは學林の安居等も全く停止の姿であつたが、文化元年に至つて勸學職を設けることとなり、杵旭慧航等の十一名がこれに任ぜられ、翌年、勸學の下に司教、助教、得業を置くこととなつて、學制の樹立を見た、文政九年、第二十世廣如の傳燈が行はれた、内には智洞の餘黨が全く終熄するには至らなかつたが、外には幕末多難の秋に當り尊王攘夷の論が盛んに起り、風雲正に急を告げたが、當時の學者としては富永仲基服部天游の排佛説に當つた潮音、中井竹山平田篤胤に對した南溪があり、天文説を研究して新しき外來思想に結抗せんとした介石を出した。龍護、月性等の勤王の英僧の現はれたのもこの時代である。廣如父子亦勤王の志厚く、廣如は南禪寺境内の龜山天皇の御陵の荒廢したのを見て、元治年中にこれを修理し奉つた。慶應二年正月、朝廷はその功を賞して、御衣一領を下賜し給ふた。又元治元年の長州兵の亂に際し、荒神口に橋が無かつたので朝廷はその必要を感じ、西本願寺にその架橋を命ぜられた。慶應三年に至つて架橋の工事を畢つた、工費は五萬兩を超えたといふ。人はこれを勤王橋の名で呼んだ。明治元年廣如は

法嗣德如に命じて、累代の家臣門徒等を率ゐて御所九門の内外を警備せしめた。同年、廣如は軍艦一隻を献納したき旨を奏上したが、朝命により軍艦献納の代りに近郊五個所(大津、伏見、八幡、山崎、嵯峨)を警備することとなり、德如は自ら草鞋竹杖の姿で攝河泉の間を巡化し、門徒に對して、御一新の旨を説き、その去就を諍らぬやうに諭した。

分派後の東本願寺に於いては寺基の固まること共に、各地に別院が置かれ、教如から宣如琢如常如一如の時代に互つてその數約三十に上つた。中にも明曆三年に出來た江戸淺草の別院、元祿二年創立の名古屋別院、正徳二年竣成の難波別院などは何れも規模の大なるもので、専ら布教の方面に活動した。この布教の發展と共に學事の勃興も著るしく寛文五年に太宰府觀世音寺の學寮の規模を移してこれを別邸の涉成園(枳殼邸)内に置き、學寮と呼んで一派教育の機關とした。この教育の興起に就いては、先驅者として慶秀圓智等を忘れることが出來ぬ。慶秀は大和の人で、元龜三年十五歳の時顯如に會ひ、後深く心を宗學に寄せて、慶長の頃正信偈私記、三帖和讃私記、安心決定鈔私記を著はした。圓智は京都の人で、琢如に重んぜられ、その著書も十部程ある。學寮草創の當時に於ては、東坊了海、長覺寺、臆慶等が教授の任に當つたが、正徳五年に至つてはじめて講師職を置き、一派の學頭たらしめ、西福

寺惠空がその初代に成つた。惠空は享保六年に七十八歳を以て長逝したが、たゞに宗學の研究ばかりでなく宗史に關しても絶えず注意を怠らなかつた。著書は數十部あるが内外兩典に精通してゐたことは驚くべきものである。惠空の後慧然を経て慧琳が三代の講師職を襲ふに及んで、寶曆四年に學寮を高倉魚棚の地に移し、覺舎を新築し規模の擴張を見た。高倉學寮の名稱はこれから起つたのである。寛保三年に至つて講師職の下に副講師を置き、更に寶曆七年にその下に擬講師を設け、これを總稱して三講者といつた。寛政五年に第四代の講師慧啟(惠空の孫)が歿したので、翌年に深勵がその職を嗣いだが、文化八年に更に宣明を以て講師とした。講師二人の併置はこの時にはじまる。深勵は香月院に號し、一派宗學の大成者を目せられて居る。この時に當つては學事は未曾有の盛觀を示し、所化即ち學徒の數は年を逐ふて増加し文政十一年には、千七百十四人、天保九年には、千八百四十七人を算した。宣明以後、寶景、法海、大舍、徳龍、靈附、義讓、宣成、得住龍溫相次いで講師に就任し明治維新に至つた。かくの如く碩匠が引續き現はれ、學事の勃興するに共に、異解者を出だした。こゝは西派と同様である。たゞ西派ほど深刻な擾亂を惹起しなかつたまでのことであるが、既に貞享の頃越後に異義を主張するものが現はれ、その後、出羽の公巖、肥後の法幢、美濃の寶巖、石見の定觀、

遠江の龍山、越後の頼成、能登の頼成、越前の是海等が出た。この中で能登の頼成は弘化嘉永の交に、異義を唱道し、講師の説理に伏せず却つて京都所司代に訴へ出たので、嘉永五年に幕府は獄に下し豊前に流した。宗學の發展を叙するに因んでこゝに是非擧げておきたいのは國語學に多大の貢獻をなした義門である。義門は若狭小濱の妙立寺主で、宗學は靈曜(深勵の門人)に受けたが、和語聖典の研究をするには、國語の根柢を極めねばならぬこゝを悟り、畢生の心血を語法訓點に注ぎ、本居宣長の遺業を繼承して、終に日本語文典の研究に重要な一標石を置いた。眞宗和語聖典の註釋數部をはじめ、山口之栞、男信、於乎輕重義、友鏡底廻影なき不朽の著を残した。

なほこゝに東本願寺に於ける文學趣味の傳統に一瞥を與へておきたい。既に蓮如が即興詩人ともいふべき一面を有し、百八十餘首の和歌を傳へ、その子の實悟や孫に當る顯誓が何れも和歌の趣味を有したが、天文日記による證如も連歌に淺からぬ縁をもつてゐたやうである。こゝろが分派の後、第十三世の宣如は石川丈山と親交があつたばかりでなく、松永貞徳に就いて俳句を學び、しかも貞徳の悪風には染まず、その風吟は甚だ高尚であつた。その子の第十四世琢如は俳號を白話といひ、貞徳及び北村季吟に師事し、第十五世の常如第十六世の一如は何れも季吟に従つて盛んに俳諧を興行した。

この常如一如を兄として生れた人に晴寛がある。即ち芭蕉門下の俳人として名を馳せた越中井波の浪化その人で、子の桃化も亦名を知られてゐる。その後第二十一世の嚴如は和歌に造詣深く歌集根柢の花を残して居る。西本願寺の歴代にも勿論文學趣味がなかつた譯ではないが、その傳統に於ては東本願寺の方がより鮮かであつたといはねばならぬ。

天明八年に兩堂類焼の厄に遭つた東本願寺は寛政十年、即ち第二十世達如の代に至つて新築落成した。その後二十五年を経て文政六年に再び烏有に歸し、その後更に安政五年、元治元年に類焼し、前後四度焼失の災を蒙つたが、慶應元年に至つて孝明天皇は、堂宇再興の給旨を下し、且つ白銀三十枚を賜ふて、土木の資に充てしめ給ふた。翌年幕府も亦金五萬兩を下附して、再建事業を援けた。この時に際して王政復古の世運に會ひ、第二十一世嚴如の苦心は一方ではなかつた。東本願寺は元來家康の庇護によつて建立され、徳川氏の恩顧を受けてゐたから、徳川氏の動搖が東本願寺に影響するところは激甚であつた。こゝに於て東本願寺は勤王佐幕の板挟みであつたが、嚴如は深く決心を定めて法嗣現如と共に、王事に奔走し、文久三年攘夷親征の議の定まるに同時に、一萬兩を朝廷に獻じ、明治元年正月に至つて山階宮晃親王に赤誠を披瀝して誓書を上つた。かくて嚴如父子は夫々東山東海

北陸の各方面に勤王の大義を宣へ各地方から朝廷に獻納せしめた金穀は莫大の數量に上つた。

高田専修寺が加越の動亂にいつも守護に加擔して、本願寺の徒の混同を避けたことは前に述べた通りであるが、その後専修寺は絶えず同様の態度に出で、永祿の三河の一揆にも徳川氏を援け、元龜の長島一揆にも織田氏に附いた。第十四世の堯眞はその女鶴子をして秀吉に仕へしめたから、豊臣氏とも親密の關係を結んでゐた。關ヶ原戰後慶長十四年になつて、徳川秀忠は、専修寺の住持職をはじめ諸國末寺門徒等は給旨に任せ、これまで通り少しも變らぬいふ安堵狀を下し、元和三年には寺領の朱印狀を與へた。その後専修寺は安濃津の領主藤堂氏と姻戚關係を結んで、益々寺門の振興を謀つたが正保三年一度焼失した堂宇も、寛延元年に至つて完備した。その後伏見宮貞致親王の第五子を迎へて、第十八世とし圓猷といつた。その夫人は京極宮文仁親王の王女美目宮であつた。

兩本願寺に於て學事の勃興を見たに同じく、専修寺に於ける宗學の先驅者としては元祿四年に七十九歳で長逝した慧雲に先づ指を屈せねばならぬ。慧雲は京都の本誓寺であるが、宗學の研究に心を傾け、幾多の著書を出した。中にも教行信證鈔二十五卷が最もよく知られて居る。慧雲は少し遅れて普門が出た。伊勢の彰見寺で、教行信證師資發覆鈔二百五十卷は、教行信證の註疏中最も浩澹なる

ものこして有名である。次いで伊勢の良空駿河の慧海が出た。良空の著高田正統傳は、今日から見れば殆んど史籍としての價値はないが、一派の正統を力説した點にその苦心を偲はしめる。一派の教育設備として寛文十二年に安居の制を設け、寛保の頃にはこれを學寮と呼び、講習機關の成立を見た。慧雲普門の出たころは、一派の學頭職を能化と稱したが、學寮制度の成立と共に、これを學頭の名に改め、圓邊の時代には更に講師と稱し、後にはその下に准講師の職等を設けた。寛政八年、眞淳が學頭となつてゐた時代に、勸學堂が新築され、宗學勃興の機運に向つたが、安政年間には行信の問題について門末の間に爭論さへ起つた。行信の法亂といはれるのがこれであるが、慶應年間に至り、第十二世堯瀨の裁斷によつて靜穩に歸した。なほ江戸時代に於ける専修寺の出來事としては、三尊の天拜を擧げねばならぬ、三尊といふのは下野高田に安置されて居る一光三尊の彌陀如來像のことで、延享二年四月にこれを京都で開帳した時、櫻町天皇は宮中に迎へて親しく禮拜し、更に同寸の模像を彫らせて常に恭敬し給ふたが、爾後歴代の天皇が三十三年毎に宮中に迎へて拜禮し給ふ例になつたから、これを天拜と稱するのである。明治元年王政維新となるや、堯瀨は献金して軍資に充て、誓書を呈して勤王護法に盡さんことを奏上した。

その他の諸派は以上の三派に比べると勢力も微々たるもので、別段史實として特記すべき程のものもなかつた。江戸時代の眞宗の沿革を終るに臨んで遺餘一得三集に見ゆる各本山の准門跡としての供御を擧げるに左の如くである。但しこれは慶應三年の記録である。

西本願寺	西 六 條	一向宗	三百石
東本願寺	東 六 條	一向宗	無 高
専修寺	勢州一身田	一向宗	三百五十石
佛光寺	五條坊門高倉	一向宗	六石八斗
興正寺	西 六 條	一向宗	百五十石
錦織寺	江州木部	一向宗	二十石

合計 八百廿六石八斗

次に明治大正時代に於ける眞宗の變遷を叙述せねばならぬ順序であるが、簡單に年代記的に摘記列擧するにこゝめておく。宗勢の推移は大體これで察せられるであらう(括弧内は宗外關係の事項)。

明治元年

正月、兩本願寺献金。本派本願寺廣如、宮城六門内を警護す。興正寺に東海鎮撫總督輔翼を命ぜらる攝信・澤好門徒を率ゐる大津に向ふ。東本願寺に官軍の糧食を補充せしむ。廣如嚴如軍用献金のため濃尾諸國を巡諭す。本派本願寺の學林に宗乘の外、曆學國學儒學破邪學の四科を置く。

二月、東本願寺米金献納。

三月、兩本願寺献金。興正寺米金献納。天皇親征、大阪本派本願寺別院を行在所にす。

四月、東本願寺献金。

(閏四月、寺院住職の任免は、總て太政官に出願せしめ、又本山末寺の宗門國郡寺號等を調査し届出しむ。
(六月、本願寺興正寺等に神佛判然の趣旨を明かにし、廢佛毀釋の誤解を門徒に諭さしむ)。
十二月、諸宗同徳會盟を興正寺に開く。

この年、本派の鐵然・默雷・有藏・連城等數名の有志と共に上洛し本山を改革す。大谷派は學寮の分場として護法場を設け、外教を修めしむ。

○同 二一年

正月、本派の鐵然、その郷里周防國大島郡内の僧侶及び農兵を集めて、護國團を興す。次いで藩

命を奉じて萩町准圓寺に改正局を開く。

三月、攝信澤好等、眞言淨土時宗を連署して邪教を制禁せんを請ふ。

五月、攝信、攝津を巡化す。本派本願寺一派大會を招賢閣に開く。

(七月、神祇官を太政官の上に置き民部省に寺院寮を設け寺院の事項を管掌せしむ)。

八月、攝信、北越を巡化す。

九月、東本願寺、北海道の地を賜ひ開拓せしむ。

十二月、佛光寺に北海道後志石狩の地を賜ひ開拓せしむ。

○同 三一年

一月、嚴如に金を賜ふ。

二月十日、大谷派本願寺の現如、北海道開拓の途に上る、七月七日函館に着す。

九月、東本願寺に員外擬講を置く。

十一月、西大谷祖廟の堂舎落成す。

○同 四一年

正月、本派本願寺境内地を上地す。

三月、三河菊間藩一揆起る。

五月、攝信等耶蘇教傳播の豫防を圖る。法住大谷派講師となる。

八月十九日、本派第二十世廣如遷化、時に七十四歳、次いで十月法嗣明如襲職。

十月、大谷派の空覺刺客のために害せらる、贈講師。現如、北海道開拓の功を奏して京都に歸る。

十一月、大谷派東鳳等の異義者頓成の舊説を唱ふ。

十二月、宗名を一向宗と稱せしむ。

○同 五年

一月、本派の尊融、默雷、連城等渡歐。

三月、專修寺堯猷生る。家教、佛光寺第二十六世の法燈を嗣ぐ。一向宗を眞宗と改稱せしめらる。

舜台、契縁等大谷派の教學を一新す。兩本願寺、興正寺、佛光寺、專修寺、錦織寺華族に列す。

五月、大谷派本願寺寺務所開設。

六月、兩本願寺和親。大谷派高倉學寮を貫練場と改稱す。

九月、現如、舜台、白華等渡歐。(僧侶に苗字を稱せしむ)。

(十月、一宗に一管長を置かる)。眞宗各派は年番交代に管長に任せらるゝこととなり、專修寺堯猷眞宗管長となる。

この年、慈空本派勸學となる。

○同 六年

四月、嚴如、眞宗管長となる。

六月、佛光寺家教得度。

七月、本派の尊融等、歐洲よりの歸途印度の佛蹟を禮して歸る。この月 如等も歸朝す。

八月、大谷派は從來の學職の名を廢し、一等二等三等の學師號を設く。

十一月、嚴如に代りて明如、管長となる。各派宗祖以下歴代の命日に太陽曆を用ふることを約す。

十二月、大谷派本願寺療病院建物を献す。

この年、本派員外勸學及び勸學以下定員の制を廢す。靈潭、針水、勸學となる。

○同 七年

三月、教部省令して各派に管長を置くも亦妨けずとす、こゝに於て佛光寺一派獨立して別に管長を置き、その他の四派は尙合同して一管長たり。

八月、大谷派異義者頼成を破門す。講師法住逝く。

十月、本派の勸學靈潭逝く。慶忍勸學となる。副講を廢す。

○同 八年

二月、眞宗、各派大教院を脱す。嚴如、管長となる。彰如生る。

四月、本派、學林を廢し普通専門の二科を置く。

七月、兩本願寺、興正、佛光、專修、錦織の諸寺に家祿を賜ふ。明如、管長となる。大谷派、新教育制度を 表し、大中小三教校を設立す。なほ外に育英教師の二教校を開く。

九月、西本願寺、家祿を奉還す。

十一月、本派教授校の創設を發表す。各縣に小教校を設け又教員養成所を置く。

十二月、鏡如生る。

この年、本派の介石、世益新聞を發行す。

○同 九年

三月、本派の教授校成る。

五月、本派の興隆教社設立。

六月、專修寺堯熙、管長となる。大谷派の笠原研壽、南條雄英國留學の途に上る。

九月、本派所轄の興正寺別立、管長を置く。

十月、本派大中小教校の設立を發表す。大谷派教會結社。

十一月二十八日、親鸞に見眞大師の謚號を賜ふ。

この年、眞宗五派合同協議して宗規綱領を定む。大谷派教導習練場を設けて布教者を養成す。

○同 十年

四月、本願寺、大谷、專修寺、木邊、興正の各派別立、各管長を置く。眞宗教務局を廢す。

六月、大谷派異義者佐々木徹周を破門す。嚴如、熊本に病院を建て、治療す。

十二月、攝信示寂。時に年七十。

大谷派、支那上海に江蘇教校、北京に直隸教校を設け、支那開教の人材を彼地に於て養はんことす。

この年、大谷派に琉球布教を許す。又奥村圓心朝鮮に入りて布教す。豪攝寺火。

○同 十一年

正月 大谷派、朝鮮に留學生を送る。

二月、本派所轄出雲路派山元派、天台宗所轄誠照寺派別立、各管長を置く。

七月、大谷派は始めて中教校を開き、且つ貫練場内に譯文編輯の二局を置き、以て梵書の翻譯新著の出版をなさしめんとす。

八月、頓成回心して大谷派に復籍す。専修寺教費を教校に改稱す。

十二月、大谷派所轄三門徒派別立、管長を置く。

この年、河内西部に光明頭燃等の秘事法門流行す。

○同 十一年

正月、大谷派大教校建つ。

二月、大谷派教師教校を興福寺内に移す。琉球に布教せんとするや藩廳これを拒む。本派の勸學力精進く。

四月、大谷派の渥美契縁渡支。

五月、興正寺、祖廟落慶。本派大教校開校。大谷派大門三尊。開眼供養。

六月、大谷派貫練場を貫練教校に改稱す。

九月、兩本願寺専修寺に見眞の勅額を賜ふ。

十一月、大谷派本山兩堂再建の舉を發表す。

十二月、本派の大教校落成す。勸學寬寧逝く、壽八十三。

○同 十三年

正月、大谷派春秋兩講の制を復す。

二月、大谷派教師教校を育英教校に合併す。

四月、大谷派本山再建費下賜。佛光寺に見眞の勅額を賜ふ。

七月、佛光寺再建費下附。

九月、本派宗興に勸學を贈る。

十月、大谷派本山起工。亦成講社設立。

十二月、本派監獄教誡を始む。

この年の夏、本派の介石、憂國社を興す。

○同 十四年

二月、大谷派の渥美契誠逝く。

六月、本派寺法を定む。西本願寺派を本願寺派東本願寺派を大谷派と稱す。

十一月、本派奨學條例を定む。大谷派の白尾義夫、松江賢哲等渡支。

十二月、本派の北畠道龍渡歐。

この年、専修寺派を高田派と改稱す。

○同 十五年

三月二十二日、蓮如に慧燈大師の諡號を賜ふ。

この月、兩本願寺々號混同するを以て大谷派本願寺を東本願寺と稱す。蓮如の山科墳墓の地を兩本願寺に下附。

四月、細川千崑等、占部觀順と宗義の對論をなす。

八月、大谷派改革、派内紛擾。

十一月、佛光寺本堂上棟。大谷派の笠原研壽疾により歸朝。藤枝澤通、菅了法渡歐。

十二月、本派の佐田介石逝く、壽六十五。大谷派貫練教校を學寮に復稱、同時に學職も復舊す。樋口龍温、講師となる。

○同 十六年

四月、南條文雄オックスフォード大學印書局より大明三藏聖教目錄を刊行す。

五月、高倉大學寮講堂建つ。南條神興、大谷派講師となる。

七月、笠原研壽逝く、壽三十二。

○同 十七年

正月、北畠道龍歸朝。

四月、大谷派本山影堂立柱。

五月、南條文雄歸朝。

九月、彰如得度。本派普通教校を興す。大教校を眞宗學庠と改稱す。

十月、明如、本派管長となる。

十一月、二條秀源、誠照寺派管長となる。

十二月、藤原善融、山元派管長となる。

この年、本派、塞淵に勸學を贈る。

同 十八年

正月、木邊賢慈寂。

二月、木邊淳慈、木邊派管長となる。

(三月、諸宗派に各宗制寺法を定めしむ)。

(四月、舊門跡寺院に限り、門跡號の復稱を許す)。

五月、大谷派門跡號を復す。

六月、藤原善住、山元派管長となる。

七月、大谷派の講師樋口龍溫逝く、壽八十六。

○同 十九年

六月、高倉大學寮に専門兼學の兩部を置く。本派、斷鏡に勸學を贈る。

七月、本派の勸學並護漸く、壽八十。

九月、大谷派、興正寺、宗制寺法を定む。

十二月、本派宗制寺法を定む。

この年、本派、護持會を興し、教學の基礎たるべき資本を募集す。常盤井堯猷渡獨留學。

○同 二十年

正月、專照寺聞如寂。南條文雄印度に入る。

五月、南條文雄歸朝。

六月、南條神興逝く、壽七十四。

十一月、頼成歿す。

この年、大谷派、澄立に講師を贈る。

○同 二十一年

二月、大谷派の織田得能等暹羅に入る。

三月、大谷派、京都府尋常中學校を經營す。

五月、本派、大學林令を發す。即ち眞宗學庠と普通教校とを合併して大學林となし、二院（内學院・考究院）一寮（文學寮）を置く。

六月、佛光寺家教、伏見宮に復籍。南條文雄、文學博士の學位を受く。

十月、澁谷眞意、佛光寺派管長となる。大谷派名古屋に大谷普通教校、金澤に共立尋常中學校を設く。

○同 二十二年

四月、義天、大谷派講師となる、次いで逝く。本派、教會條例を定む。大谷派本山御影堂を大師堂と改稱す。

五月、大谷派本山大師堂上棟。

十月、現如、大谷派管長となる。武田行忠、大谷派講師となる。

この年、本派の藤島了穩フランスより歸る。

○同 二十三年

正月、大谷派の武田行忠等、占部觀順と教義につき對論。

四月、本派、安居條例を定む。

五月、大谷派本山本堂立柱。武田行忠逝く。

七月、織田得能歸朝。

九月、大谷派、教師等級十四級を定む。

○同 二十四年

正月、誠照寺二條秀量寂。大谷派寺務所職制改正。

八月、大谷派、能登教校を同金澤共立尋常中學校に合す。

○同 二十五年

四月、本派の文學寮竣工。

五月、大谷派本山酬徳會を始修す。

六月、大谷派金澤共立尋常中學校を大谷派尋常中學校と改稱。

九月、大谷派大學寮に研究科を設く。

十一月、大谷派本山本堂上棟。

○同 二十六年

正月、大谷派本願寺臨時整理局を設く。

三月、金澤大谷尋常中學校を京都尋常中學校に合す。

五月、平光圓、三門徒派管長となる。

六月、本派勸學原口針水逝く、壽八十六。

七月、佛光寺派の善連法彦逝く、壽三十五。

九月、雲英晃耀、大谷派講師となる。

○同 二十七年

正月、嚴如寂、時に七十八歳。

六月、大谷派院家座席を五等に分つ。

七月、大谷派學制を變へて、大學寮中學寮の二類とす。細川千崑、楠濟龍講師となる。

八月、兩本願寺軍隊慰問使を朝鮮に派す。

九月、本派の藤井宣正、佛教小史第一卷を著はす。大谷派、圓龍、圓解、知現に講師を贈る。

十一月、大谷派本山鐘樓成る。

○同 二十八年

四月、大谷派本山兩堂落慶。木邊孝慈、木邊派管長となる。

七月、南條文雄、村上專精、徳永(清澤)滿之等、大谷派本願寺に改革建白書を進む。

十二月、證誠寺藤原善融寂。大谷派僧侶喪服の制を定む。議制局を開く。

○同 二十九年

正月、大谷派教學資金積立法を定む。

二月、大谷派大學寮内に宗乘專攻院を置く。

五月、藤井宣正、佛教小史第二卷を著はす。

六月、大谷光尊、大谷光瑩に伯爵、澁谷眞意、常盤井堯熙、木邊孝慈に男爵を授く。兩本願寺轉派取扱規約を定む。清澤滿之等、大谷派の改革を唱へ、教界時言を發刊す。

七月、大谷派學制を定む。

八月、大谷派眞宗中學寮を眞宗京都中學に改稱。

九月、大谷派眞宗大學寮を眞宗大學に改稱し、安居研究の規制に依れるものを高倉大學寮に稱し別置す。

この年、大谷派、義陶に講師を贈る。

○同 三十年

正月、本派眞宗教會規則を定む。專照寺宣如寂。

二月、大谷派、村上專精、清澤滿之等を處分す。

三月、大谷派寺務所職制改定。本派、看護婦養成所規則を定む。

四月、專修寺勸學院火く。

七月、本派、別院職制を定む。眞宗大學々監占部觀順を免す。調雲集、大谷派講師となる。

十一月、細川千崑逝く。大谷派久留米學館を久留米中學に改稱。

○同 三十一年

正月、鏡如、公爵九條道孝の三女籌子を迎へて室こなす。

二月、藤井宣正、現存日本大藏經冠字目錄を著はす。

四月、佛光寺澁谷隆教得度。兩本願寺、蓮如の四百年忌を修す。

六月、大谷派太田祐慶渡鮮。

七月、本派の姫宮大圓逝く、壽六十。大谷派教導講習會を教導講習院に改稱。

八月、大谷派連枝勝信、瑩誠渡支。本派留學生規則を定む。

九月、大谷派の谷了然渡支。

十月、大谷派の連枝勝尊、小栗憲一等渡支。

十一月、大谷派、織田得能を除籍す。沼僧淳等渡支。京都に東洋教學院を置く。

この年、大谷派、觀月に講師を贈る。

○同 三十二年

正月、興正寺圓頓學寮火く。正月より五月に至るまで鏡如支那に旅行す。

二月、大谷派教導講習院を東京に設く。大谷派宗制寺法改定。

三月、村上專精、佐藤誠實文學博士の學位を受く。

六月、本派、佛教慈善財團設立。

七月、常盤井堯熙歸朝。大谷派占部觀順を擯斥す。大谷派軍隊布教開始。

八月、大谷派講師調雲集逝く。

九月、大谷派學制改定、眞宗大學を豫科本科研究科の三科に分ち、眞宗中學を京都及び東京の二校に併合す。廣陵了榮、講師となる。

十二月、鏡如、海外旅行の途に上る。

この年、大谷派、春安居を廢し、秋安居の期を五十日間を改む。

○同 三十三年

四月、本派學制變更、佛教中學、佛教高等中學、佛教大學を置く。大谷派、姫路大谷女學校設立。

大谷派の近角常觀、池山榮吉宗教制度視察のため渡歐。廣陵了榮逝く。

五月、彰如、佛骨奉迎正使として暹羅に赴く、南條文雄、藤島了稔等これに従ふ。

六月、藤島了稔、巴里萬國宗教大會出席のため、暹羅より佛國に渡航。

七月、佛骨奉迎使歸朝。

九月、本派、佛教高等中學を東京高輪に移す。

十月、大谷派職制改正、石川舜台寺務總長となる。

十二月、藤井宣正、政教調査のため渡英。本派護持會財團設立。藤島了稔歸朝。拙巖、訶提に勸學を贈る。

○同 三十四年

二月、大谷派連枝瑩誠渡英留學。本派布教取締總則を定む。前田慧雲、本願寺派學事史を著はす。

四月、大谷派連枝瑩亮渡獨留學。佛光寺本堂上棟。本派の佛教大學を専門佛教大學と改稱、高輪佛教高等中學を高輪佛教大學と改稱す。渡邊法瑞、龍山慈影、吉谷覺壽大谷派講師となる。

五月、大谷派教學商議會規則を定む。連枝勝信渡米留學。

六月、大谷派副管長の制を設く。彰如、副管長となる。

七月、村上專精、佛教統一論第一編を著はす。

八月、織田得能等、喇嘛阿嘉を送り入支。

九月、大谷派眞宗大學を東京府下巢鴨村に移す。

十月、村上專精、大谷派の僧籍を脱す。

十一月、本派褒賞條例を定む。

十二月、本派巡教師條例を定む。

○同 三十五年

三月、近角常觀等歸朝。

四月、眞宗大學條例改定。本派の大洲鐵然逝く、壽六十九。

六月、大谷派、稻葉了證、藤谷遠由、奥村圓心等を除籍す。

九月、高田派勸學院、徵兵令により認定。

十月、藤井宣正、鏡如の佛蹟探檢に参加し英國より印度に入る。

十一月、南條文雄、東洋學會臨席のため、佛領東京に渡航。興正寺火く。

○同 三十六年

一月、明如寂、時に年五十四歳、鏡如本願寺派管長に任ず。

三月、鏡如歸朝。

五月、前田慧雲、文學博士の學位を受く。

六月、本派の勸學齋藤間精逝く、壽六十五。藤井宣正、マルセイユに逝く、壽四十五。清澤滿之逝く、壽四十一。本派、教學方針を門末に指示す。前田慧雲、大乘佛教史論を著はす。

十月、眞宗東京中學を谷中より巢鴨に移す。前田慧雲等、教學私見を公にし本派内騷擾す。

十一月、興正寺落慶。

○同 三十七年

一月、大谷派の多田鼎、佐々木月樵、曉烏敏等精神界を發刊す。

三月、高輪佛教大學廢止して、京都の専門佛教大學と併合し單に佛教大學と稱す。

四月、本派、前田慧雲、酒生惠眼等を除籍す。

五月、眞宗大學、専門學校令により認可。

○同 三十八年

一月、澁谷隆教、佛光寺派管長に任ず。佛教大學、専門學校令により認可。

二月、藤原善登、山元派管長に任ず。

三月、大谷派の小栗柄香頂逝く、壽七十五。佛教大學徵兵令により認定。
六月、石川舜台、大谷派除籍。伊藤證信、巢鴨に無我苑を起す。
十月、大谷派の江村秀山逝く。

この年、前田慧雲等本願寺に復籍、日露戦役従軍布教師、本派三八、大谷派三、興正寺一。
○同 三十九年

一月、大谷派の篠原順明逝く。大谷派婦人法話會設立。

二月、巢鴨無我苑解散。

四月、大谷派の渥美契縁逝く。

九月、鏡如渡支。

○同 四十年

五月、鏡如歸朝。三十七八年戦役奉公の功勞を嘉し鏡如に勅語を賜ふ。

八月、高倉大學寮、専門學校令により認可。

十一月、本派の北畠道龍逝く、壽八十八。

○同 四十一年

十一月、彰如、大谷派管長となる。

○同 四十二年

二月、高倉大學寮、徵兵令に依り認定。本派彦根佛教中學を京都佛教中學に合す。

四月、攝信上人勤王護法録を刻す。

九月、鏡如印度及び歐洲旅行の途に上る。

○同 四十三年

二月、大谷派の講師雲英晃耀逝く、壽八十。佐々木月樵、親鸞聖人傳を著はす。

四月、大谷派本山大師堂門上棟。

この年、鏡如、自ら六甲山二樂莊に中學を開く。

○同 四十四年

二月三日、本派の島地默雷歿す、壽七十四。

八月十八日、織田得能逝く、壽五十二。

九月、大谷派、高學、學寮、眞宗大學を併合し、眞宗大谷大學をなし、京都室町頭にその位置を定む。

○大正元年

三月、眞宗大谷大學の學則を改定し、兼修、專修、研究の三科をす。

十一月、眞宗大谷大學移轉開校。華園眞淳、興正派管長に任ず。

○同二年

二月、本派の妻木直良、藏經書院より眞宗全書を發刊す。

六月、清澤全集第二卷出づ。

○同三年

二月、清澤全集第一卷出づ。鏡如職を退く。

五月、佛教大學より佛教大辭彙第一卷出づ。

十二月、同じく第二卷出づ。

○同四年

一月、眞宗全書正編四十八冊を刊行し終る。

二月より同續編を發刊す。

十月、清澤全集第三卷出づ。

○同五年

一月、眞宗全書續編十二冊を刊行し終る。

九月、文學博士村上專精眞宗全史を著はす。

十二月、眞宗大谷大學より眞宗大系を發刊す。

○同七年

三月、眞宗大谷大學佛教史學會より戊午叢書を發刊す。

○同十一年

一月、佛教大學より佛教大辭彙第三卷出づ。

○同十二年

二月、現如寂、時に年七十二。

三月、新撰眞宗聖典出づ。意譯眞宗聖典上巻出づ。

四月、各派聯合して眞宗協和會を組織し、夫々開宗七百年の法要を營む。

五月、眞宗大谷大學及び佛教大學は大學令により設立認可、即ち大谷大學、龍谷大學に改稱す。
九月、意譯眞宗聖典下巻出づ。

(大正以後に於ては根本史料の整理が出来て居ないから、不備の點が尠くない。他日の完成を期す。)

結語

上來、眞宗教團の史的発展を概叙したが、最後に私は眞宗教團としての「あるべき」發展を附け加へておきたい。「あるべき」發展とは何であるか。答は簡單である、祖聖親鸞の精神に復るにある。眞宗教團の發展が正しい徑路を辿つて居るか否かは一にこの點にあるといつてよいのであつて、親鸞の精神を没却し、開宗本來の意義から遠ざかつて居る時は、即ち邪路に陥つて居るいはねばならぬ。然らば祖聖親鸞の精神といひ、開宗本來の意義とは何であるかといへば、聖人の生涯を述べる際に指摘しておいた如く、眞宗の教團は聖人の教團でもなく、又門徒の教團でもない。偏にこれ如來の教團で

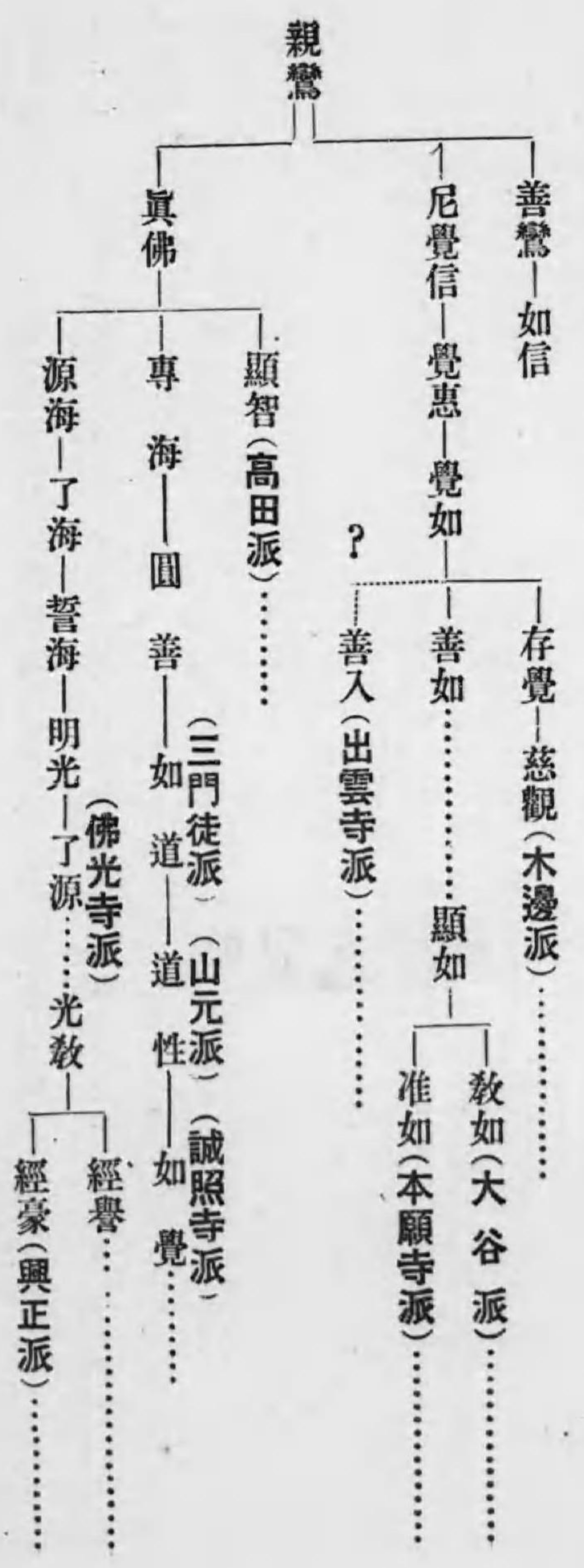
ある。この如來の教團に向つて、自己所有の念を働かせ、何等かの作爲を加へる時、既にそれは如來の教團ではなくして、局分された一宗派に固定してしまふのである。聖人が常にいつた他力とは義なきを義とするといふことは、如來の本願を味得する精神上の風光ばかりでなく、又生活に對する態度でなければならぬ。

人事は刻々に變化し、思想は日々に新たである。この社會文化に對して、一宗派といふ固定概念に執着し或ひは囚はれて居る人々は、遅れざらんことをこれ事として居るが、その歩みは絶えず喘ぎを伴ひ、遅れがちである。殊に明治維新以後の政治上社會上の大改變に對する所謂法城を護る人々の狼狽態は餘り多いへば餘りのことであつた。徳川幕府の倒壊と共に封建制度は既に崩れてしまつたにもかゝらず、教團内に於ては今なほ封建的の陋習はなほ脱せず、階級觀念は教團の發展を固く束縛して居るかのやうである。法城の裡に居る人々は、法城の崩れ行く音を聞くことが出来ないものである。今日の眞宗教團をして如來の教團たらしめよ。今日の眞宗教團が既成宗教の殻を蟬脱する道はこれより外にないのである。而して眞宗成立の思想的基調たる「眞實」をして光輝あらしめよ。「眞實」の宗教、「眞實」の政治、「眞實」の教育、「眞實」の道德、「眞實」の文藝。そこに洋々たる「眞實」文化の世界

を想望するこゝが出来るのである。親鸞教徒として生き行く世界は實に絶大無邊である。親鸞の精神を通じて、眞宗の發展が法然——源信——善導——道綽——曇鸞——天親——龍樹——釋尊——彌陀如来に過去に溯つて無窮であるが如く未來に於ても亦無限である。眞實教團としての「あるべき」發展は、永遠の生命を有するのである。この永遠の生命を汚し傷け阻むものは如来の教團たるこゝを忘れて既成宗教の岩に閉ぢ籠らうとする固陋觀念の所有者であるこゝを繰返し指摘しておく。

附 載

一、眞宗分派系統



附載 眞宗分派系統

二 眞宗各派歴代 (但し歴代の順序は各派の所傳に據る)

○本願寺派 (本山本願寺 京都市下京區堀川通七條上ル本願寺門前町)

親鸞¹ — 如信² — 覺³ — 如(宗昭)⁴ — 善⁴ — 如(俊玄)⁵ — 綽⁵ — 如(時藝) —
 巧⁶ — 如(玄康) — 存⁷ — 如(圓兼) — 蓮⁸ — 如(兼壽) — 實⁹ — 如(光兼) —
 證¹⁰ — 如(光教) — 顯¹¹ — 如(光佐) — 准¹² — 如(光昭) — 良¹³ — 如(光圓) —
 寂¹⁴ — 如(光常) — 住¹⁵ — 如(光澄) — 湛¹⁶ — 如(光啓) — 法¹⁷ — 如(光闡) —
 文¹⁸ — 如(光暉) — 本¹⁹ — 如(光攝) — 廣²⁰ — 如(光澤) — 明²¹ — 如(光尊) —
 鏡²² — 如(光瑞) — 大谷氏

○大谷派 (本山本願寺 京都市下京區烏丸通七條上ル常葉町)

(11)まで本願寺派に同じ。
 教¹² — 如(光壽) — 宣¹³ — 如(光從) — 琢¹⁴ — 如(光瑛) — 常¹⁵ — 如(光晴) —

達²⁰ — 如(光海) — 眞¹⁷ — 如(光性) — 從¹⁸ — 如(光超) — 乘¹⁹ — 如(光遍) —
 如(光朗) — 嚴²¹ — 如(光勝) — 現²² — 如(光瑩) — 彰²³ — 如(光演) —
 ○現住 大谷氏

○高田派 (本山專修寺 三重縣河婆郡一身田町)

親鸞¹ — 眞佛² — 佛³ — 顯智⁵ — 專空⁴ — 定專⁶ — 佛順⁷ — 證 —
 定⁸ — 順⁹ — 定⁹ — 顯直¹⁰ — 慧眞¹¹ — 智應¹² — 眞堯¹³ — 慧堯¹⁴ — 眞 —
 堯¹⁵ — 秀¹⁶ — 堯朝¹⁷ — 圓猷¹⁸ — 圓猷¹⁹ — 遵²⁰ — 圓祥²¹ — 圓禧 —
 堯熙²² — 堯猷²³ — 猷²³ — 常盤井氏住

○佛光寺派 (本山佛光寺 京都市下京區高倉通佛光寺下ル新開町)

親鸞¹ — 眞佛² — 源海³ — 光信⁴ — 了⁴ — 海(願明) — 誓⁵ — 海(願念) —
 明⁶ — 光(了延) — 了⁷ — 源(空性) — 源⁸ — 鸞(了英) — 了⁹ — 明(順了) —

附載 眞宗各派歴代

唯¹⁰了(源讚)——性¹¹曇(堯經)——性¹²善(經實)——光¹³教(堯仁)——
 經¹⁴譽(堯守)——經¹⁵光(堯賢)——經¹⁶範——存¹⁷海——經¹⁸海——
 隨¹⁹庸(堯導)——隨²⁰如(堯庸)——寬²¹如(堯超)——順²²如(堯祐)——
 隨²³應(眞乘)——隨²⁴念(眞導)——教²⁵應(眞達)——家²⁶教(眞意)——
 隆²⁷教(眞空)——○現住 澁谷氏

○興正派 (本山興正寺 京都市下京區堀川通七條上ル華園町)

(13)まで佛光寺派に同じ。

蓮¹⁴教(經豪)——蓮¹⁵秀(經照)——證¹⁶秀(經堯)——顯¹⁷尊(佐超)——
 准¹⁸尊(昭玄)——准¹⁹秀(照超)——良²⁰尊(圓超)——寂²¹岷(由常)——
 寂²²永(常勤)——寂²³聽(常順)——法²⁴高(闡揚)——眞²⁵恕(堯揚)——
 本²⁶誓(攝生)——本²⁷寂(攝信)——本²⁸常(澤稱)——本²⁹昭(眞淳)○現住 華園氏

○木邊派 (本山錦織寺 滋賀縣野洲郡中里村大字木部)

親鸞¹——如²信——覺³如(宗昭)——存⁴覺(光玄)——慈⁵觀(綱嚴)——
 慈⁶達(綱昭)——慈⁷賢(達嚴)——慈⁸光——慈⁹範(觀昭)——
 慈¹⁰澄(教嚴)——慈¹¹養(賢昭)——慈¹²教(勝嚴)——慈¹³統(信昭)——
 良¹⁴慈(昭嚴)——常¹⁵慈(良嚴)——宅¹⁵慈(常昭)——觀¹⁷慈(常嚴)——
 賢¹⁸慈(良昭)——淳¹⁹慈——孝²⁰慈(尊行)○現住 木邊氏

○山元派 (本山證誠寺 福井縣今立郡新横江村大字横越)

親鸞¹——善²鸞(慈信)——淨³如——鸞⁴如——旦⁵應——如⁶顯——
 道⁷閑——道⁸性——善⁹充——善¹⁰壽——善¹¹教——善¹²光——善¹³如——
 善¹⁴炭——善¹⁵養——善¹⁶應——善¹⁷閑——善¹⁸阿——善¹⁹念——善²⁰超——

附載 眞宗各派歴代

眞宗史要
善融²¹—善住²²—善瑩²³
○現住 藤原氏

○三門徒派 (本山專照寺 福井市豐町)

如¹導²淨³了³泉⁴淨⁴一⁵源⁵如⁶海⁷空⁷惠⁷
如⁸空⁹如¹⁰善¹¹連¹²慶¹³善¹³性¹⁴善¹⁴空¹⁴
如¹⁵善¹⁶如¹⁶閑¹⁷證¹⁷如¹⁸廣¹⁸如¹⁹善¹⁹慶¹⁹善²⁰賢²⁰如²¹善²¹空²¹
聞²²如²³光²³如²⁴宣²⁴如²⁵光²⁵圓²⁵平^{○現住}氏

○出雲路派 (本山毫攝寺 福井縣今立郡味眞野村)

親¹鸞²鸞³入⁴智⁵幸⁶岌⁷善⁷教⁷
善⁸鎮⁹善⁹覺¹⁰光¹¹善¹¹秀¹²照¹³善¹³舜¹⁴善¹⁴譽¹⁴
善¹⁵休¹⁶善¹⁶問¹⁷善¹⁷准¹⁸善¹⁸榮¹⁹善¹⁹祐²⁰善²⁰雲²¹善²¹靜²¹

善慶²²—善聽²³
○現住 藤原氏

○誠照寺派 (本山誠照寺 福井縣今立郡鯖江町大字下深江)

親¹鸞²性³如³覺⁴良⁴覺⁵秀⁵覺⁶雲⁷應⁷
秀⁸慶⁹榮¹⁰秀¹⁰意¹¹盛¹²顯¹³惠¹⁴秀¹⁴山¹⁴
秀¹⁵誠¹⁶海¹⁷秀¹⁷如¹⁸存¹⁹憲²⁰實²¹秀²¹芳²¹
秀²²要²³秀²³嚴²⁴秀²⁴觀²⁵秀²⁵量²⁶源²⁷秀²⁷曉^{○現住}二條氏

眞宗史要終

大正十三年四月二十日印刷
大正十三年四月廿五日發行

眞宗教義と眞宗史要

定價壹圓五拾錢

著作權所有

著者

廣瀬南雄

著作

橋川正

發行者兼印刷者

西村七兵衛

京都市下京區中珠數屋町烏丸東入
二十八番町二十二番戸

發行所

京都市下京區中珠數屋町
烏丸東入四十五番
電話一七〇四番
大坂區下町一丁目

法藏館

內村田文泉株式會社印刷部
外田文泉株式會社印刷部

37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25
同	立大住	松	松	松	岸	竹長	漆	藏法	松	松	沼	木
	花須田	田	田	田	本	中島	間	立教	本	本	夜	津
	賀賢智	青	青	青	義	慧淳	徳	教開宗	雪	雪	濤	龍
	慧秀見	針	針	針	導	照心	定	念號	城	城		城
	明道	針	針	針								
同	正當	真	愚	金	先	伏	歌	教	無	句	惠	
	譜用	心	者	剛	徳	明	法	行	無	佛	み	
		徹	の	の	芳	語	然	信	懺	上	につ	
	三特	宗	信	の	語	人	上	證	無	上	ま	
	製	聖	仰	信	談	全	人	に	愧	人	れ	
	方	典	仰	信	談	傳	親	現	三	菊	て	
	革	四	四	四	四	菊	は	は	六	洋	四	
	金	六	六	六	六	並	親	は	三	並	六	
	製	半	半	半	半	並	鸞	は	六	並	並	
	四	洋	洋	洋	洋	並	聖	は	四	並	並	
	六	洋	洋	洋	洋	並	人	は	六	並	並	
	半	洋	洋	洋	洋	並	人	は	四	並	並	
	革	洋	洋	洋	洋	並	菊	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	四	並	並	
		洋	洋	洋	洋	並	並	は	六	並	並	
		洋	洋	洋	洋</							

63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51
平田	稻村	稻村	稻村	稻村	稻村	稻村	稻村	田淵	田淵	田淵	田淵	田淵
華藏	修道	修道	修道	修道	修道	修道	修道	静縁	静縁	静縁	静縁	静縁
布	新大藏經の心	新大藏經の心	新大藏經の心	新大藏經の心	新大藏經の心	新大藏經の心	新大藏經の心	新大藏經の心	新大藏經の心	新大藏經の心	新大藏經の心	新大藏經の心
教	教	教	教	教	教	教	教	教	教	教	教	教
理	語	集	集	法	藥	教	話	誠	月	涙	譬	談
三六紙洋	三六紙洋	三六紙洋	三六紙洋	三六紙洋	三六紙洋	三六紙洋	三六紙洋	三六紙洋	三六紙洋	三六紙洋	三六紙洋	三六紙洋
八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	三〇	一五〇
四	四	四	四	四	四	四	四	三	三	三	二	三

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38
田淵	田淵	田淵	田淵	大藤	上杉	泉	齋藤	大屋	大屋	大屋	南條	住田
静縁	静縁	静縁	静縁	順海	文秀	芳環	唯信	徳城	徳城	智成	文雄	智見
說教妙辯辭典	各宗教布教大資料全集	布教資料全集	布教大辭典	布教雄辨集	法然上人の念佛義	佛教地獄極樂論	阿彌陀佛總論	佛各宗聖徳太子の信仰	聖徳太子傳	玉耶經講話	六方禮經講話	親鸞聖人全書
三六洋	四六半洋	四六半洋	四六洋	四六洋	四六洋	菊洋	菊洋	菊洋	四六紙洋	菊洋	菊洋	四六半洋
三五〇	二〇〇	一五〇	七〇〇	二〇〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	七〇	七〇	五〇	二〇〇
三	三	三	一八	八	四	八	八	六	四	四	二	〇

84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72
大淵小華	岸本鬼史	佐々木月樵	赤沼智善	春秋庵主人	廣瀨南雄	真宗中學校	真宗中學校	稻葉圓成	河野法雲	隈部慈明	同	舟橋水哉
童話	稲田の親鸞	華嚴經の新しき見方	佛敎の正しき女性觀	聖蹟二一十四輩順禮	傳説の親鸞	唯識綱要	俱舍宗大意	天台四教義新譯	華嚴五教章講義	大乘起信論精義	俱舍論頌疏要義	七十五法名目講義
集	鸞	方	觀	禮	鸞	要	意	譯	義	義	義	義
四六並	四六並	四六洋	四六洋	四六洋	四六洋	菊洋	菊洋	菊洋	菊洋	菊洋	菊洋	菊洋
六〇	三〇	一〇〇	一〇〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	三〇〇	一五〇	二〇〇	一五〇	一五〇
四	二	四	四	八	八	八	八	二	八	二	八	八

71	70	69	68	67	66	65	64
河崎顯了	安藤州一	大淵小華	竹中慧照	東海夫	竹中慧照	柏原祐義	和田龍造
青年講話叢書八冊	道叢書十冊	日曜夜話	日曜學校經營法	火の河水の河	佛典のお伽	佛意譯維摩經	明惠上人語錄
叢書	叢書	話	法	河	伽	經	錄
八冊	十冊	四六並	三六並	四六紙洋	四六並	四六洋	四六洋
二四〇	一五〇	四〇	四〇	六〇	六〇	二〇〇	七〇
二	三	四	二	四	四	六	四

1 人生と信仰 2 求道の歷程 3 親鸞聖人の信仰 4 絶対の信仰 5 生存より宗教へ 6 人情より宗教へ 7 愛兒の死より醒めて 8 南州の人物を懐ふ 9 事上の練磨 10 生活の脅威に面して

I 果報と分限 2 運命と境遇 3 先帝と佛心 4 入信の關門 5 青年の進路 6 偉人の行蹟 7 店主と店員 8 人生と幸福

法藏館發刊六雜誌

<p>眞宗布教雜誌 月刊 新布教</p> <p>每月一回十五日發行 定價一圓五角 半年分參圓八角 一年分六圓拾錢</p>	<p>眞宗修養機關 月刊 法藏</p> <p>每月一回一日發行 定價一圓二角 半年分參圓貳拾錢 一年分六圓拾錢</p>	<p>大谷派本願寺社會課發行 月刊 兒童と宗教</p> <p>每月一回一日發行 定價九角五分 半年分參圓拾錢 一年分六圓拾錢</p>	<p>少年少女機關 月刊 日曜學校</p> <p>每月一回一日發行 定價五角五分 半年分參圓拾錢 一年分六圓拾錢</p>	<p>文書傳道機關 月刊 法の實</p> <p>每月一回八日發行 定價一圓參錢 半年分參圓五錢 一年分六圓拾錢</p>	<p>教會施本機關 月刊 同朋通信</p> <p>每月一回八日發行 定價一圓五角 半年分參圓拾錢 一年分六圓拾錢</p>
<p>博士學士の演説名僧知識の講話を 始め日々發刊の幾千新聞雜誌中よ り採り選抜したる教材は驚愕たる 大林の如く自由に滿載の材料を獲 得せらる佛敎界唯一の布教雜誌</p>	<p>法藏には毎號大中學敎授、田淵、 松澤、大山師の説敎、講話を滿載 し、領解には松田青針師の懇篤周 到なる示談あり眞に求道の士の安 住に入る第一歩</p>	<p>兒童と宗教につき最新なる資料と 緊要なる學説を提供し敎會日校經 營者唯一の指導をなすものなり。</p>	<p>近來寺院附屬の佛敎主義日曜學校 の機關として佛敎趣味の説話を最 平易に面白く笑ひ乍ら讀める少年 少女達の無二の友達なり。</p>	<p>大須賀秀通師主筆の下に時代に適 應したる大問題を捕へ來り縱横に 信仰的解釋を試みたる古今獨歩の 趣味と實益に富める小雜誌なり</p>	<p>近藤純悟師を中心にして眞實道の 大道を闡揚せる青年婦人會に適當 の雜誌なり。</p>

104
284

終